名北の空の下

署長室から

名古屋北労働基準監督署長　田中哲夫（たなかてつお）

24

前衛短歌のふるさと　～歌人（うたびと）どちが夢の跡～

労働基準行政としてディーセントワークの実現を標榜している関係上、自分自身の健康と余暇の過ごし方を大事にしたいと考えている。私の場合は、余暇として「田中徹尾」という号で歌壇に籍を置き、短歌中心の生活をしている。

「短歌」というと、一般的には花鳥諷詠を連想される方が多いが、近代・現代歌壇のほとんどはそうではない。その典型的な例が、昭和二十六年に興った前衛短歌運動である。行政に携わる者としては、できるだけ理解し易い文章作成を心掛けているが、前衛短歌に出会った時は、その対極にある文芸だったので、正直驚いた。この前衛短歌の原点は何と言っても塚本邦雄である。第一歌集の『水葬物語』は当時の歌壇の必須テキストであった。

●革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化してゆくピアノ

塚本邦雄『水葬物語』（昭和二十六年）

●突風に生卵割れ、かつてかく撃ちぬかれたる兵士の眼

塚本邦雄『日本人霊歌』（昭和三十三年）

それ以前は、西洋美術に感化された写実の歌が中心であり、歌壇は写生を旨とする斎藤茂吉や土屋文明などの歌人を輩出した。学校の教科書には、万葉の短歌、平安の和歌、そして写生のアララギ派の歌が多数を占めていた。かろうじて明治期の与謝野晶子、北原白秋、若山牧水、石川啄木が取り上げられる程度であった。現在、アララギ系の歌がほとんど影を潜めてしまったことに、時代の流れを感じる。

先日、岡井隆の短歌講座を聞きに管内の「文化のみち二葉館」を訪れたが、その中に歌人春日井建の歌集・蔵書が展示されていることに懐かしさを覚えた。春日井建は、塚本邦雄や岡井隆と並んで前衛短歌の旗手である。関東・関西に拠点を置いていた前衛短歌運動だったが、名古屋はこの前衛短歌発祥の地であった。

●童貞のするどき指に房もげば葡萄のみどりしたたるばかり

春日井建『未青年』（昭和三十三年）

●火祭りの輪を抜けきたる青年は霊を吐きしか死顔をもてり

岡井隆も愛知一中（現県立旭丘高校）出身なので、名古屋北署管内には前衛短歌のふるさとがあると言える。

●灰黄（かいこう）の枝をひろぐる林みゆ亡びんとする愛恋ひとつ

岡井隆『斉唱』（昭和三十一年）

アララギとの訣別と批評された名歌。この三句目の「みゆ（見ゆ）」がアララギ系の体裁を保ちながら、上句と下句が情景と心情を同時に表現するという現代歌壇の詠み方の基礎であると位置付けされている。前衛短歌の枠を外して次の歌を鑑賞いただきたい。

●抱くときに髪に湿りのこりいて美しかりし野の雨を言う

岡井隆『斉唱』（昭和三十一年）

●原子炉の火ともしごろを魔女ひとり膝に抑へてたのしむわれは

岡井隆『鵞卵亭』（昭和五十年）

イラスト・伊藤栄章